



## 佳作

書評 五十嵐太郎著『美しい都市・醜い都市：現代景観論』

(中央公論新社 2006年)(和泉開架 518.8/223//W ほか)

商学部3年 矢部晴果

2020年に東京でオリンピックが開催されるというニュースを聞いたとき、私は、この書物を思い出した。この書物のテーマは、都市の美しさをめぐる常識の問い直しであり、著者は、東京を中心に、美観をめぐり評価の分かれる具体的な建築物や景観を論じながら、美しい都市とはどのようなものであり、醜い都市とはどのようなものであるのかを考察している。

1964年の東京オリンピックをきっかけにして出現した建築物や景観もまた、具体例として取り上げられている。東京オリンピックのために整備された首都高速道路（以下首都高速）と日本橋の景観の関係には、特に重要なケースとして多くの文字数が費やされている。

日本橋は、全国の道路の起点であり、日本にとっても東京にとっても歴史的に重要な場所である。それにもかかわらず、現在は、首都高速が橋の上を走り、空の眺めが失われている。そして、そのせいで、首都高速は、東京の景観破壊の象徴と見做され、「醜い」都市景観の代表として繰り返し批判されてきたと著者は言う。

私自身もまた、この書物を読むまで、首都高速を魅力的であると感じたことはなかった。首都高速の与える印象は、著者の言葉を借りるなら「あまりにも人工的、暴力的」であり、そのために、この景観が美しいものであるとは思えなかったのである。

しかし、著者は、このような常識にあえて逆らい、日本橋の首都高速が東京らしい景観を構成するための必須の要素であることを強調する。テクノスケープのファンにとっては、美しい景観とすら考えられる、とも語っている。

オリンピックや万国博覧会に代表される大規模な国際的イベントは、都市の景観を大きく変える。2020年の東京オリンピックもまた、多くの建築物を産み出し、東京の景観を変えるに違いない。当然、東京の新たなシンボルとなるようなものが生まれる一方で、いくつかの建築物は、世間の激しい批判にさらされるはずである。そして、このようなとき、この書物は、世論に流されることなく景観を自分の目で眺めるための手がかりを私たちに与えてくれる。

「人工的な景観は、美しいものと醜いものの関係がもっと錯綜しており、複雑ではないのか」という著者の言葉のとおり、美と醜を分ける普遍的な基準などないのであろう。しかし、醜いと信じられている景観のうちにも、ことによると未知の美しさを発見できるかも知れない。私は、本書によって、今後数年のあいだの東京の変化を楽しく眺めるための一つの視点を手に入れられたように思う。